

植民地期朝鮮における創作版画の展開 (5) —釜山における清永完治と日本人の趣味家ネットワークによる 創作版画誌『朱美』の刊行について—

The Development of Sosaku Hanga (modern woodblock prints)
in Korea during the period of Japanese colonization—Part5:
on the publication of a woodblock print magazine ‘Shumi’
by Kanji Kiyonaga in Pusan, and his network of Japanese hobbyists

辻(川瀬) 千春 (TSUJI (KAWASE) Chiharu)

〒485-8565 愛知県小牧市大草愛知文教大学
Aichi Bunkyo University, Okusa, Komaki, Aichi 485-8565, Japan

要旨

植民地朝鮮（1910–1945）の釜山に移住した郷土玩具の愛好家である清永完治（1896–1971）は、釜山郷土玩具同好会の機関誌に玩具表現の手段として版画を多用し、会員に創作版画を広めていった。清永はそこで形成した趣味家や版画家のネットワークを礎に、時局下に日本本土や朝鮮の日本人の版画家や玩具の愛好家からなる趣味家のネットワークによって朱美之会を発会し、創作版画誌『朱美』を刊行した。それは植民地朝鮮における、創作版画の普及に主眼を置いたものではなく、郷土玩具の普及活動と表裏一体の活動であった。

Abstract

This paper reported the development in light of the political climate at the time of the Sosaku Hanga magazine ‘Shumi’ which was issued by Kanji Kiyonaga (1896–1971) in Pusan, and the network of hobbyists formed around him. Kiyonaga dispersed the use of woodblock prints to his colleagues through his local toy’s fellowship journal. He also personally solidified the network of woodblock artists in mainland Japan through creation of Sosaku Hanga. In this way, he realized the publication of ‘Shumi’ with the support of the network of hobbyists in the wartime regime. But the activities by Kiyonaga and his associates were not focused on the dissemination of the Sosaku Hanga in colonial Korea; they were from cooperative efforts to promote local toys.

0. はじめに

植民地期朝鮮（1910–1945）において刊行された創作版画誌は、1930年に朝鮮創作版画会が京城（現・ソウル）で発行した『すり絵』（朝鮮創作版画会、1930a–b）と、釜山に移住した郷土玩具の愛好家である清永完治（1896–1971）と趣味家の仲間によって形成された朱美之会が刊行した『朱美』（清永、1940a–c；1941–1942）の2誌が知られている。趣味家とは何かを蒐集する好事家のことで、郷土玩具の蒐集はその代表格とされる（鈴木、2009）。

さて、『すり絵』については、辻（2016a）において、それが1930年前後に京城で発会した植民地期朝鮮における唯一の創作版画の活動団体であった朝鮮創作版画会が創刊し、第2号まで刊行したことを確認している。これまでの調査で（辻、2016a）、本誌は、朝鮮創作版画会が、京城日報社記者で美術家

の多田毅三（生没不詳）を中核として創作版画の普及活動を展開する中で刊行したものであったことを明らかにした。また『すり絵』は、多田が1926年に創刊した朝鮮芸術雑誌『朝』（朝鮮芸術社）において版画の投稿を呼びかけたが実現を見ず、『朝』の後継誌として1928年から1929年にかけて刊行した朝鮮総合芸術雑誌『ゲラ』（朝鮮芸術社）において、版画作品1点の掲載を経て、漸く創作版画誌の刊行を実現させたものであったことも明かした（辻，2016a）。しかしながらこれらの雑誌はいずれも短命で、『すり絵』も第2号までの2か月間の存在が確認されているに過ぎない。

一方、『朱美』は、時局下の1940年5月に釜山で創刊され、1942年8月までの足かけ2年間に計5冊刊行された。なお、『朱美』と表紙にあるのは第1冊のみで、第2冊以降は『創作版画朱美之集』とあるが、目次には全て『朱美』と記されているので、本稿ではこれに統一する。さて『朱美』については、管見では韓国における論考は皆無であり、日本では、畑山（2002）において、植民地朝鮮における「版画創作状況を知る手がかり」として畑山が入手した第2冊から第5冊による本誌の概要と、清永完治や同誌に作品を寄せた「版画家たち」についての経歴などが報告されている。加治（2005）では、同誌全5冊の概要と各冊の全図版が掲載されている。また清永完治については、鈴木（2009）において、日本本土だけでなく、植民地の広がりと共に移動した朝鮮、満洲、台湾などの趣味家の間で、清永が朝鮮玩具の第一人者と認識され、ほとんどの郷土玩具の趣味家が玩具蒐集に朝鮮を訪れる際に、清永を尋ね援助を得たと報告された。そしてこうした趣味家の間では、版画によって表現した玩具情報や消息などの通信が頻繁に交わされたことから、版画が当時の「趣味家のたしなみ」であったことが示唆されるとしている（鈴木，2009）。

本稿では、これらの先行研究を踏まえ、日本本土では1941年6月時点において、大分の版画家武藤完一（1892–1982）が発行する『九州版画』が「現今では我国唯一の版画誌となった」（武藤，1941a）と認識される状況下に（注1）、『朱美』が時局下にどのように創刊をみて、2年間に渡り刊行されたかを明らかにする。はじめに、そもそも「趣味家のたしなみ」とされた版画（鈴木，2009）を、清永がいつから手掛け、彼の仲間をどのように版画界に取り込んで朱美之会の礎を築いたかを明らかにする。次いで先行研究では詳述されてこなかった『朱美』各冊に附された「朱美通信」の記述等に基づき、朱美之会の会員数や作品発表点数等の推移を踏まえて、時局下の創刊を支え、2年間に及び刊行を維持した朱美之会の会員について明らかにする。おわりに、時局下に創刊され刊行を続けた『朱美』が、どのような経緯で終刊に至ったか考察する。

なお、本報告では、植民統治下における当該地域を研究対象としており、一部不適切な当時の呼称などもあえてその時代を指すものとして「 」を付さずにそのまま用いている。ただし朝鮮美術展覧会の略称は朝鮮美展を採用するが、引用文においては鮮展という表現を原文のまま用いた。釜山郷土玩具同好会の機関誌『土偶』（1937年5月、第3期2号から『土偶志』に改題）（清永，1935–1942）については、「（清永，刊行年．刊行月）」とし、新聞からの引用は、例えば「（『京城日報』，年．月．日）」などとする。また旧字体はすべて新字体に改めた。掲載図版のキャプションについては、題目，作者，制作年，（掲載紙誌等），所蔵者の順に記した。

1. 清永完治と趣味家ネットワークにおける版画創作の展開

前述のように版画は「趣味家のたしなみ」とされるが（鈴木，2009），そもそも郷土玩具を愛好する版画家は少なくない。その理由を版画家の関野準一郎（1914–1988）の言説に窺うことができる。関野（1935）は「郷土玩具と創作版画とが一脈相通ずる所がある」とし、大量生産や複製ができない点を挙げる。そして「郷土玩具の持つ重要性は製作された其の土地の匂が豊であるべきで、地理的歴史的な香がその玩具にしみ込んでその素朴さ稚拙さの味こそ版画家の好む重要な特色である」とする。すなわち

版画家が郷土玩具を愛好するのは、共にその土地の風土に育まれた味わいによって特徴づけられるからといえる。同様に郷土玩具の愛好家にとっても、版画によって郷土玩具を表現することは、郷土玩具の味わいを存分に発揮できる手段と認識されたため、彼らの通信手段として版画が多用され、また版画を知らない趣味家もその手法を身につけようとしたと考えられる。ここでは、清永がそうした表現手段としての版画をいつから手掛け、清永の周囲に形成された趣味家のネットワークにおいて版画創作はどのように広がっていったか見ていく。

清永は、釜山開港期の入植者の1人として事業に成功し同地で最大の富豪とされた義父大池忠助(1856-1930)(高崎, 2002)の要請で、1931年に朝鮮に渡り、終戦まで釜山に居住した。地理的に日本本土に最も近接する釜山は、朝鮮で最も早く開港し(1876年)、最初に日本人が入植した地域であった。そして植民地朝鮮における鉄道敷設により、釜山にその南東端の起点を擁したことで、海上及び陸上移動の要所となり、日朝間及び朝鮮半島各地へ、さらには日本本土から大陸各国への出発地、中継地として賑わった(坂本, 2007)。

清永の玩具趣味は移居前からすでに始まっており、早稲田大学卒業後の就労地である仙台で、馬の郷土玩具の蒐集を始めたことが契機であったという(鈴木, 2009)。しかし清永の個人的な蒐集活動が普及活動に転じていくのは、清永が釜山に移住して5年後の、1935年8月に清永の下に集った、主に釜山の日本人教員など6人によって発会した釜山郷土玩具同好会の機関誌『土偶』の創刊(清永, 1935.8)によった(注2)。そして『土偶』創刊に伴い、後述するように日本本土の玩具界の重鎮である孔版画家板祐生(1889-1956)や、郷土玩具を愛好する古美術研究家であり、板をはじめ多数の版画家を世に送り出した料治朝鳴(1899-1982)らの知遇を得たことにより、清永や『土偶(志)』が、日本本土の玩具の趣味家や版画家などからも一目置かれる存在になっていった。『土偶(志)』(清永, 1935-1942)には、日本本土や植民地各地から清永を訪ねた趣味家との交流についてしばしば報告されている。

さて、板祐生との交際は、『土偶』第1期4号(清永, 1935.12)において、清永は板を「敬慕する先輩」とし、板から同誌に「督励の言葉」が寄せられたと記しており、『土偶』を創刊してじきに板は清永と交流を始めたとわかる。また料治朝鳴との交流も、『土偶』第1期2号(清永, 1935.9)の「文献報告」欄において、料治が主宰する白と黒社発行の『版芸術』を、「各地の郷玩版画集 毎月発行」と紹介して以来、『土偶(志)』において白と黒社発行の『郷土玩具集』『おもちゃ絵集』等の料治の仕事を知らせている。一方料治は、自身の創作版画誌において、清永を「釜山の友人」として紹介し、『土偶』の刊行を紹介している(料治, 1936)。こうした玩具趣味を通しての版画界の重鎮との交際は、後述するように清永が版画界のネットワークを広げる糧となっていく。

清永の版画創作は、釜山郷土玩具同好会の活動が機関誌の刊行を通して活発化するに従い、同誌における版画による玩具表現や版画の普及活動として展開していく。その契機となったのは、1936年3月『土偶』第2期1号(清永, 1936.3)において、板祐生から孔版の寄贈を受けて、それが表紙を飾ったことによったと考えられる(図1)。清永はこれに先立つ『土偶』第1期第4号に自身が制作した仮面の版画を入れようとしていたが実現にいたらなかったことを記しており(清永, 1935.12)、すでに『土偶』に版画を挿入しようと考えていたことがわかる。そこへ、「私淑して居る板(祐生:筆者)さんより表紙絵、小野(正男:筆者)さんより版画を恵まんとの御来翰を得て編輯



図1. 満洲首人形(表紙孔版), 板祐生, 1936, (清永, 1936.3), 鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵。

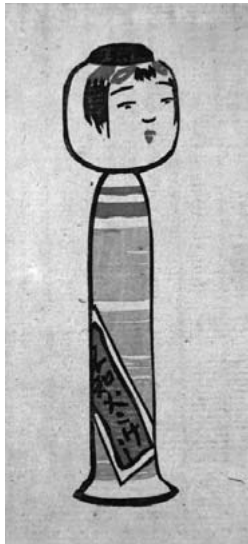


図2. 不知火おぼこ(版画), 小野正男, 1936, (清永, 1936.3), 鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵.



図3. 大將軍(蔵書票版画), 料治朝鳴, 1936, (清永, 1936.3), 鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵.

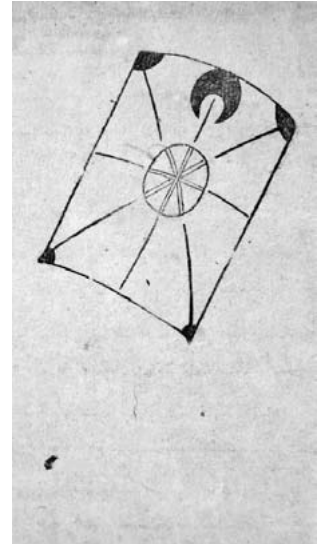


図4. 凧(ヤン)(版画), 清永完治, 1936, (清永, 1936.3), 鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵.

子先ず飛び上がって驚喜した」(清永, 1936.3)のである。本号には前掲の通り板の孔版画と、久留米の医師で玩具仲間の小野正男(1910-1977)の木版画の他に(図2), 料治朝鳴からも朝鮮の玩具を題材とした清永用の木版蔵書票を得て(図3), 清永が制作した凧の版画(図4)と共に口絵として掲載し発刊している。小野と清永との交際は深く, 小野が1937年11月から1939年12月まで軍医として中国大陸に従軍中も, 小野のために『土偶志』慰問号を刊行し, また同誌において度々戦地の小野を思いやっている(清永, 1937.11-1940.3)。そして『土偶』に版画の掲載が開始されると, 小野は毎号九州から版画を寄せ, また小野が制作した『朝鮮玩具版画集』を釜山郷土玩具同好会から刊行している(清永, 1936.5)。

『土偶』第1期1号から4号(清永, 1935.8; 9; 10; 12)では, 図版は白黒の写真掲載に留まっていたが, 第2期1号に前掲の様に版画作品が4点掲載された後は, 誌面がカラフルに一新されることになった。すなわち『土偶』第2期2号に, 「前巻(第2期1号:筆者)より始めました版画挿入を今回は特に増してみました」, 「始めて問のない習作ばかりでかえって物笑いですけど枯木も山の賑いと云うところで見逃して貰い度いと思います」とある(清永, 1936.5)。第2期2号ではさらに「同人の中でこの方面にも応援して頂ける方があると更に幸いと思います」と版画の投稿を呼びかけている。

そして板祐生から毎号送達される孔版画が『土偶』の表紙を飾り[板の娘の死去により送達されなかった第4期2, 3号(清永, 1938.6; 12)を除く], 版画の掲載点数も第3期1号では「版画もこれから十葉にしました」と増やしている(清永, 1937.2)。本号には, 小野正男の他に, 後に朱美之会の会員となる福岡の玩具の趣味家で教員の梅林新市(1902-1968)や, 釜山郷土玩具同好会の中林景三郎(生没不詳)と仁志定治(生没不詳)の作品が新たに加わっている。清永は, 「中林さんも(版画を:筆者)始められ, 仁志君の脂の乗り切った力作を加え」, 立派な雑誌となったと記している(清永, 1937.2)。仁志は同号の消息欄に「このところ版画に非常に興味が出まして盛に彫って居ります」と近況を記し, その後も1940年3月に高松に転住するまで(清永, 1940.3), 同誌に版画作品を積極的に寄せているのが確認される。

また1937年5月の第3期2号では, 後に朱美之会の会員となる当時熊本の中学校教員であった梅原與

惣次（1901–1977）が、体調を崩し、「文を綴ることも版を彫ることもできない」と近況を報告しており、版画創作が定着した会員もあったと分かる。また同号では、福岡の淵上正月（生没不詳）が初めて版画を2点寄せて、版画にも興味を持ち、そろそろ勉強し始めたと記している（清永、1937.5）。その後、日中戦争の勃発（1937年7月）により、本誌の刊行も急速に困難になり、1942年8月までの5年間に8冊刊行して休刊となるが、その間も1939年5月の第5期1号には新たに長野の版画家小林朝治（1898–1939）が版画を寄せるなど、休刊まで多色版画の掲載は継続された。

こうしてみると、清永は、主宰する釜山郷土玩具同好会の機関誌『土偶』の創刊に前後して版画創作を始め、同誌に集う玩具仲間にも積極的に版画を推し広め、彼らの間にも次第に版画創作が広がっていったことがわかる。そして1937年に清永は初めて版画作品を日本本土の創作版画誌に発表している。料治が編集・刊行した『版画蔵票』（白と黒社刊）の第4号に初めて作品1点を発表すると、続いて第5、8、10号に、作品を合わせて4点（10号のみ2点、他は1点掲載）寄せている。また1939年には「榛の会」の会員に料治の紹介で選出されている（武井、1939）。「榛の会」は、1935年に版画家・童画家の武井武雄（1894–1983）が主宰し、川上澄生（1895–1972）、平塚運一（1895–1997）など日本の錚々たる版画家を会員とする会員限定の版画の年賀状の交換会である。会員は50名に限られ、毎年刊行に当り出品者は厳選され、名のある版画家も容赦なく落選した。したがって本会に名を連ねたことは、清永が版画家として版画界に承認されたともみることができる。ただ武井は清永の入会に当って「清永氏は誰でも名簿を見て清水と読むが困りますから御注意下さい」と添えており（武井、1939）、まだ版画界に清永があまり知られていなかったとわかる。したがって版画界での清永の名が本格的に広まるのはこれ以降であったと思われる。1940年に青森から仁川に移住した版画家佐藤米次郎（1915–2003）が企画した、1941年に京城で開催された蔵書票展覧会の目録では、作品1点を出陳した清永の経歴を「版画家」と記している（佐藤、1941）。なお本展覧会や佐藤米次郎の植民地朝鮮における創作版画活動については別稿を以て詳述する（辻、2017）。清永は、このように玩具の趣味家とのネットワークを育みながら、彼らに版画創作を促し、自身も版画による玩具表現を礎に創作を続け、「版画家」としての内実も備えて日本本土における版画界のネットワークも強固にしていった。

2. 『朱美』創刊を支えた作家たち

このように清永や彼の仲間たちは、版画を郷土玩具の表現手法として『土偶（志）』に取り込み、さらに後述するように、創作版画を主体とした版画誌の刊行を「思いつく」（清永、1940a）。しかしすでに時局下に『土偶志』の存続さえ危ぶまれ、前号から5か月を経て、漸く刊行をみた『土偶志』第5期1号で「全く死闘のあえぎを続けて来」たと漏らしている（清永、1939.5）。それ以降も、同年10月に2号を刊行するものの、第6期は1940年3月に1号が刊行されたただけであった（清永、1939.10；1940.3）。第7期は1年3か月後に1号を刊行し、続く2号は翌1942年の8月に漸く刊行されたが、同時に清永は「休刊」を宣言した（清永、1939.10；1940.3；1941.9；1942.8）。

さてこうした中で『朱美』の創刊がどのように実現したのか、創刊号に付された「朱美通信一」（清永、1940a）の記述にしたがって見ていく。「朱美通信一」には創刊の経緯が、「藪から棒と云う言葉がありますが、文字通り全く急な思いつきで」（清永、1940a）とある。さらに、「第一回は急な思いつきでお願いしました関係上作品の集まりが大変遅れ電報でお願いした先もありました」とする。そして今回は会員不足のため1人に2、3点依頼したが、本来は1人1点の発表で25部刊行が目標であるとあり、慌ただしく創刊を思い立ったと知れる。

そもそも、『朱美』を支えた朱美之会の発会については、畑山（2002）では、『土偶志』第5期2号（清永、1939.10）における「釜山朱美会創立」の記述に着目し、清永の自宅の別称である「木馬洞」で第1回の

作品小展示会を催したことが記されていることから、1939年5月28日を、『朱美』を運営する「朱美之会」の発会とし、「朱美会」と「朱美之会」が同一のものである蓋然性が高いとしている。しかしながら、この朱美会は、清永（1939.10）によれば、「額に範をとり趣味の絵額を作る」とあり、翌月開催された「造型美術研究会の第六回造型美術展へ応援出品をなす」とある。この造型美術研究会は、『京城日報』（1939.5.16）によれば、二日一郎（生没不詳）が主宰し、釜山商工会議所に研究拠点のある会員60余名に及ぶ染色工芸品の研究団体で、展示物も屏風、衝立、革染などであったとあることから、朱美会は文字通り造型的な額縁を制作する趣味の会であり、『朱美』の刊行とは関連がないとみる。ただ、後述するように、朱美之会には、朝鮮美展の工芸部門の入選作家である野田習之（1918-2002）や尾山清（生没不詳）などもあることから、清永の趣味的な交流が玩具、版画、さらには染織工芸などと幅広いものであったことが窺える。

さて「朱美通信一」は、『朱美』創刊の経緯を次のように明かしている（下線は筆者が付した。以下同様とする）。

（前略）保田兄の熱心な煽動もあり、京城の版友尾山兄とも協議し、版画の会を企てましたところ、内地の諸大家を初め鮮内の先輩の御交援を得て朱美第一冊の集成が出来ました事は主催者としてこんな幸ひを感じた事はありません。

前掲から、本誌の創刊が清永と「保田兄」「尾山兄」の3氏によって企画されたと分かる。「一兄」とは、趣味家の間で交わされる書簡や投稿などにおいて互いを「玩兄」「玩友」と呼ぶ習わしがあり、兄は敬意と羨望を込めて付されたもので、「玩人文化」の1つとされる（鈴木，2009）。したがって、両者は清永と共通のカテゴリーに属する趣味家で、清永が敬意を以って接していた趣味家であるとわかる。

この「保田兄」とは、釜山放送局に勤務する保田素一郎（生没不詳）のことである。清永は、保田の依頼を受けて（保田，1939）、同局で「朝鮮の郷土玩具」と題して講演をし、その内容を『土偶志』臨時号として刊行している（清永，1939）。ただ保田が『朱美』に寄せた作品は、第1冊に1点（図5）確認されるだけである。そして「京城の版友尾山兄」とは、「京城府並木町」（清永，1940a-c）に居住する「尾山清」のことで、「版友」とあることから玩具ではなく、清永の版画創作を通じての知己とわかる。尾山は第1冊にただ1

人作品を3点発表し、終刊まで毎回作品を寄せている（図6）。朝鮮美展には1940年第19回から、第21回を除き、1944年第23回までいずれも工芸で入選を果たしている（朝鮮総督府朝鮮美術展覧会，1940、『毎日新報』，1941.5.28；1943.5.25；1944.5.30）。清永の周囲には前掲の工芸の趣味家による「朱美会」の活動もあったことから、そうした活動が両者の交流の



図5. 蔵票鮮女，保田素一郎，1940，（清永，1940a），鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵。

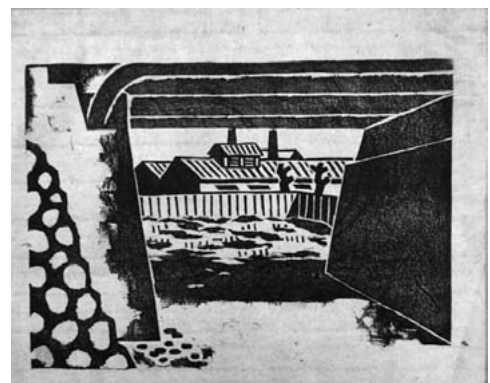


図6. ガードから見た風景，尾山清，1940，（清永，1940a），鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵。

契機であったかもしれない。また尾山は1940年第19回以前の朝鮮美展への出陳は確認されず(注3)、尾山が『朱美』第1冊から第5冊に発表した作品全9点中、『朱美』第1冊には唯一日本の風景と思われる「雪ノ井頭公園」を寄せていることから、1940年前後に同地に移住したのではないかとみる。

また「朱美通信一」(清永, 1940a)には、前掲のように「内地の諸大家を初め鮮内の先輩の御交援を得て」とあり、とくに朱美之会の成立には、日本本土の「月岡忍光氏」(1897-1976)と大邱師範学校の教員で洋画家の「岡田清一氏」(1909?-1998)の多大な尽力を得たと特筆している(清永, 1940a)。月岡が朱美之会の成立にどのように関わったかは目下のところ不明である。月岡は、1934年に料治の『白と黒』第46号(1934年4月刊。白と黒社)を皮切りに創作版画誌への作品発表をはじめ、全国各地に会員を有する料治の主宰する白と黒社の創作版画誌や『九州版画』等多数の版画誌に作品を発表し、版画家と交流している(加治, 2005)。料治が編集・発行する『版芸術』(1936年3月刊。白と黒社)第7号「全国郷土玩具集(東近畿郷土玩具集)」は月岡の版画集として刊行された。料治との交際を通して清永と月岡も、玩具趣味と重層的に展開された版画のネットワークにおいて親交を深めていったと思われる。月岡は『朱美』には第1冊以降第4冊まで作品を寄せている。

一方、岡田清一は、「大邱府三笠町七六」を拠点とし『朱美』には第1冊に2点、第2冊2点、第3冊1点を発表している(清永, 1940a-c)。第2冊に付された「朱美通信二」(清永, 1940b)に、第1冊は「作品を裸でお届けして大変不評でありましたので、岡田大兄のお力添えを以て、台紙と帙を試みました。今後も紙を努力して続けます。岡田大兄の御厚意を深く御礼申し上げます」と特筆している。これらの文言から、岡田が本誌の刊行に物理的に一役買っていたことがわかり、また「大兄」という敬称からも岡田がネットワーク内においてより敬意を払うべき地位にあったとわかる。岡田は、1931年に東京美術学校(現・東京芸術大学)図画師範科を卒業し、島根県立松江中学校勤務を経て、翌年水戸工兵第14大隊第3中隊幹部候補生となる(東京美術学校校友会, 1932a-b)。その後は、1936年に発会した日本本土の美術団体一水会(二科会を脱退した洋画家が結成した)の会員となる(武藤, 1938a)。そして朝鮮美展に1937年第16回に油彩で初入選していることから、1936年前後に朝鮮に移住したと考えられる。岡田は、朝鮮美展に初入選以降、1943年の第22回まで油彩で出陳を果たし(朝鮮総督府朝鮮美術展覧会, 1937-1940, 『毎日新報』, 1941.5.25; 1942.5.27; 1943.5.25), 1943年に「榛の会」の会員にも選出されたが、同年に応召している(武井, 1943)。清永が「大兄」としたのは、岡田の物理的な援助に対する謝意に加え、このように美術の専門家であったことによると考えられる。

岡田の版画創作が確認できる最早期は、1938年5月に大分で武藤完一が刊行した『九州版画』第17号である(図7)。これ以降岡田は大邱から大分の本誌に、20号を除き第22号まで、朝鮮の風景や風俗を題材とした作品を寄せている(武藤, 1938a-b; 1939a; 1940a-b)。武藤は同誌第17号のあとがきで(武藤, 1938a)、大邱師範の岡田の加入を伝え、東京美術学校卒などの経歴を紹介している。岡田は自身の作品が掲載された『九州版画』第17号を武藤から送達され、早速その受領を伝える書簡を武藤に送っている(注4)。本書簡に、岡田は、大邱師範において木版画を学生にやらせていることなど近況を記し、同校で図画講習会を開催するので、木版画やエッチングの作品を借りられないか武藤に打診している。また目下入手可能な版画誌の発行所の照会も依頼しており、



図7. 薬水, 岡田清一, 1938, (武藤, 1938a), 東京都現代美術館蔵。

版画創作だけでなくその普及にも熱心に取り組んでいたことがわかる。なお大邱師範学校をはじめ当時の師範学校などの図画教育における版画の広がりについては、今後の取り組むべき課題としたい。

この他創刊を支えた「内地の諸大家」「鮮内の先輩」としてどのような作家がいたか見ていく。まず「内地の諸大家」とは、後掲の「朱美之会会員一覧」（以下、「一覧」と略称する）の通り、『土偶（志）』にも版画の寄稿を続ける旧知の「玩友」「玩兄」（後述するように『土偶（志）』への出陳者は「一覧」の通番を□で囲った）や、清永が日本本土の版画ネットワークにおいて知己となった版画家たちを指しているよう。

一方、「鮮内の先輩」としては、第1冊の会員名簿によれば（清永，1940a），前掲の岡田や尾山以外にも、東京美術学校を卒業した専門作家や、朝鮮美展の入選作家、日本本土の美術展に出陳を果たしている作家、及び朝鮮において名の知れた作家などが少なくないと知れる。たとえば、「朱美通信二」（清永，1940b）によれば、「本会員より鮮展の特選として岡田、野田両氏があり伊東、尾山氏の入選がありこんなうれしい事はありません。お喜びと共に吹聴します」とある。「野田」とは、野田習之のことで戦後は染色家として知られる。釜山府富民町に居住し（清永，1940a-c），第1冊から第5冊終刊まで作品を確認することができ（図8），いずれも朝鮮の風俗や風景を描いたものであった（清永，1940a-c；1941-1942）。朝鮮美展には、1937年第16回から1944年第23回まで工芸部門に出陳している（朝鮮総督府朝鮮美術展覧会，1937-1940、『毎日新報』，1941.5.28；1942.5.27；1943.5.25；1944.5.30）。また「伊東」とは、伊東正明（生没不詳）のことで、「全州府全州師範学校」に勤務し、『朱美』には第1冊から第3冊まで各1点出品している（図9）（清永，1940a-c）。朝鮮美展にも全州から1938年第17回から1944年第23回まで西洋画に出陳している（朝鮮総督府朝鮮美術展覧会，1938-1940、『毎日新報』，1941.5.25；1942.5.27；1943.5.25；1944.5.30）。1938年には日本本土の開祖文部省美術展覧会（新文展）第2回に「朝鮮所見」、翌年第3回にも「仏魔仁王朝鮮所見」（共に水彩）が入選しており（東京文化財研究所，2006），それぞれ1939年の朝鮮美展第18回，そして翌年の第19回の入選作品と同図と思われる。

また後掲の「一覧」によれば，釜山の土肥徳太郎（1872-?）は，同地において写真館，土肥耕美園を運営し，「釜山第一流の写真師」（中田，1905）として知られた。また西村義人〔1910-1982：1940年に出征している（西村，2010）〕や台湾から会員となっている山本磯一（1898-?）も，共に東京美術学校



図8. 鉢里面，野田習之，1940，（清永，1940c），鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵。



図9. 仁王尊 伊東正明，1940，（清永，1940a），鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵。



図10. 顔の習作，山本磯一，1940，（清永，1940a），鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵。

図画師範科を卒業し（東京美術学校校友会，1932b），西村は朝鮮美展〔1939年第18回に出陳（朝鮮総督府朝鮮美術展覧会，1939）〕に，山本は台南師範学校に赴任して早々に台湾美術展覧会に無鑑査で出陳している〔1927年第1回から1930年第4回に出陳（台湾教育会，1928-1931）〕。とくに山本が『朱美』第1冊に台南から寄せた作品は、『朱美』全5冊中の唯一のエッチング作品であった（図10）。山本は東京美術学校卒業と共に台南師範学校に赴任しているが、「榛の会」の会員でもあり，日本本土の版画誌にも台南からエッチング作品を盛んに発表しており（注5），版画のネットワークにおいて清永と知己になったと考えられる。



図11. 川口風景，半田一夫，1940（清永，1940a），鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵。

そして前掲の1940年1月に仁川に移住した版画家佐藤米次郎も、『朱美』第1冊から第4冊まで作品を寄せている。佐藤も，1942年朝鮮美展第21回及び翌年の22回に入選し，日本本土の版画展にも出陳を重ねている（辻，2017）。また月岡同様に数多くの版画誌に作品を寄せ，「榛の会」の会員でもある。そして自身も版画誌を多数刊行するなど創作版画活動を活発に展開しており（辻，2017），清永とは朝鮮に移住前から版画のネットワークにおいて知己になっていたと考えられる。

この他に『朱美』の創刊を支えた「鮮内の先輩」として，後掲の「一覧」に示す通り，釜山に居住する作家が挙げられる〔「一覧」の（1）から（7）〕。『朱美』のみに版画作品が確認される作家は太字にした。清永を除き『朱美』以外には版画作品を発表しておらず，やはり清永の周囲に形成された趣味家のネットワークに端を発し版画を手掛けたと考えられる。清永は，第1冊に付した「朱美通信一」において，「初歩の方も参加して居られますので，半島の版画界を啓発して頂く意味に於て，指導して頂くと云う大衆的観点より一時見過して貰うことに致します。必ず号を追い充実した美本なものと致します」と記している。すなわち，清永は，趣味家のネットワークにおいて版画を始めた朝鮮在住の会員たちの版画の修得の場としての意義も同誌に見出している。そうした会員のうち，半田一夫（1899-?）は玩具趣味から版画をより嗜好している。半田は，元々釜山郷土玩具同好会の会員であった同僚教員の勧誘で1935年代には会員となったが，1937年に他学校へ校長として赴任すると，同会の会員としての目立った活動が確認されなくなったという（鈴木，2009）。一方『朱美』には，第1冊から第4冊まで朝鮮の風俗を捉えた版画作品を寄せている（図11）。

3. 『朱美』刊行の推移と作家の動静

このように清永の周囲に形成された朱美之会に支えられて『朱美』は時局下に創刊された。しかし清永は、『朱美』各冊に添えた「朱美通信」において，その刊行が当初から一貫してスムーズではなかったことを吐露している（清永，1940a-c；1941-1942）。本誌は，会員による実費負担によって賄われており，会員には「朱美通信」を通じて台紙の紙や送付時の梱包材の調達が困難であることが知らされ，紙類の返送や実費の送金が求められた。また，刊行期日も不安定で，第2冊は予定より1か月遅れて1940年8月に，第3冊は「身の雑事と紙難の為」2か月遅れて1940年12月に刊行された（清永，1940a-c）。第4冊は翌年2月の予定であったが，やはり「身の雑事と統制強化により仕事に追われて」1941年9月となった（清永，1941）。第5冊は1941年10月末を原稿の締め切りとして，「今度は絶対に時を間違えず刊行します，是非奮って御参加願います」としていたが（清永，1941），結局約1年後の1942年8月25日に

刊行された第5冊に「終刊」と記された(清永, 1942).

ここでは、まず『朱美』各冊の出品者と作品総数、朝鮮在住者数とその作品点数がどのように推移しているか具体的に見ていく。冊次(刊行年月日)、出品者総数(作品総点数)／朝鮮在住者数(朝鮮在住者の作品点数)の順に記す。

第1冊(1940.5.20)	22名(26点)／12名(16点)
第2冊(1940.8.25)	21名(24点)／8名(10点)
第3冊(1940.12.15)	25名(21点)／10名(10点)
第4冊(1941.9.10)	15名(17点)／7名(8点)
第5冊(1942.8.25)	6名(7点)／3名(3点)

前掲から、1940年に刊行された第1冊から第3冊までは、会員も継続的に作品を寄せており、遅延しながらも安定して運営されていたとわかる。既述のように、清永は会員数の目標を25名としており(清永, 1940a), 『朱美』第3冊ではそれを達成している。第3冊の発行に際しては、「御蔭で本誌は益々内容も充実して好評であります、沢山出してはとの御希望もありますが」とあり、増刷を求める声もあったようだ(清永, 1940c)。

しかし『朱美』第4冊の刊行は前述の通り大幅に遅れ、第4冊が刊行された1941年秋以降になると日本の戦局を如実に反映して、日本本土からの参加者が『朱美』第3冊の15人から、第4冊では8人に激減している。「朱美通信四」(清永, 1941)によれば、「此の輯には岡田(清一)、川上(澄生)、伊藤(伊東正明)、中川(雄太郎)、内山(一郎)、梅林(新市)、梅原(與惣次)、西村(義人)の諸氏の御作が、矢張色々な事故の爲め参加できませんで、非常に淋しい思いが致します」[()はすべて筆者が付した]とある。このうち朝鮮在住者は、既述した岡田、伊東、西村の3名で、他は全て日本本土からの参加者であった。すでに1940年11月末に刊行された『九州版画』第22号のあとがきに、「お互いに時局のために本職の方に忙殺されて」とあり(武藤, 1940b)、日本本土では趣味的な活動の継続はより困難を極めて行き、その1年後に日本本土で最後の創作版画誌であった本誌も廃刊となっている。日本本土からの参加者が半数以上を占めてきた『朱美』には、そうした状況が直接的に反映されたのである。

また、朝鮮在住者は創刊時こそ日本在住者を上回っていたが、その後は常に半数に満たなかった。さらに延べ89人(朝鮮在住者は延べ40人)が本誌に作品を寄せたが、そのうち朝鮮人の参加は第1冊の金正鉉(生没不詳)1名(図12)に過ぎない。『朱美』の刊行が、清永の周囲に形成された日本人の郷土玩具や版画を愛好する趣味家の発表と交流の場に終始したと言わざるを得ない。なお、金正鉉の経歴などについては目下管見に入っていないが、名簿の住所である「釜山府瀛州町五四〇」(清永, 1940a)は、釜山公立普通学校のあった地域であることから、同校の教員ではないかと考えている。

次に『朱美』各冊の会員名簿[第4, 5冊には会員名簿がない]及び目次から、朝鮮在住者の出陳状況を中心に、全会員の参加状況について居住地ごとに「一覧」



図12. 鮮女(習作), 金正鉉, 1940, (清永, 1940a), 鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵。

を掲載した(清永, 1940a-c; 1941-1942). ○数字は引用した冊次を表す. 朝鮮在住者については, 氏名, [経歴], 冊次「作品名」の順に記した. 朝鮮在住者以外は居住地及び出陳冊次のみを記した. また加治(2005)により他の創作版画誌への作品発表がなく, 『朱美』のみに版画作品が確認される作家は太字にし, 『土偶(志)』に版画の出陳歴がある会員は通番を□で囲った.

「朱美之会会員一覧」

○朝鮮在住者

- 釜山 : (1) **土肥耕美** [①②③釜山府幸町 1-37; 写真館経営・写真家] ①「部落」②「種を播く」(目次は土肥茗雲とある: 筆者) ③「鮮舞」(目次は土肥徳太郎とある: 筆者)
- (2) **半田一夫** [①②釜山府谷町 3-75; ③釜山大淵公立尋常小学校] ①「牡丹台」「川口風景」②「槐亭里風景」③「海路」④「通度寺風景」
- (3) **野田習之** [①②③釜山府富民町 3-10] ①「早春」②「少女の印象」③「雙魚(題箋)」④「鉢里面」⑤「仁王門の踊聲」⑥「石窟庵十二面観音」
- (4) **保田素一郎** [①釜山府昭和通り 2-29; 釜山放送局,] ①「蔵票鮮女」
- (5) **山口孝二郎** [①釜山府大新町 463-2] ①「面(習作)」
- (6) **金正鉉** [①釜山府瀛州町 540] ①「鮮女(習作)」
- (7) **清永完治** [①②③釜山府大倉町 2-9] ①「枇杷(題箋)」②「或る路地」③「初夏」④「山門風景」⑤「水仙(題箋)」⑥「水原長安門」⑦「道」
- 全州 : (8) **伊東正明** [①②③全州府全州師範学校] ①「仁王尊」②「將軍標」③「眼鏡をかけた男」
- 大邱 : (9) **岡田清一** [①②③大邱市三笠町 76; 1931年東京美術学校図画師範科卒(東京美術学校校友会, 1932b)] ①「陽春街頭スケッチ」「蔵票(冬ノ号)」②「屋根」「庭」③「秋果を売る」
- 仁川 : (10) **佐藤米次郎** [①②仁川府浜町 17 木村方; ③仁川府本町 2-17] ①「仁川風景」②「鮮女」③「蔵書票(自家用)」④「蔵書票」
- 京城 : (11) **尾山清** [①②京城府並木町 151; ③京城府並木町 4-151] ①「雪ノ井頭公園」「霧島風景」「ガードから見た風景」②「瑞鳳(題箋)」③「踏切のある風景」④「蔵票(自家用)」⑤「艶子の像」「蔵書票」⑥「郊外の停車場」
- 慶尚南道 : (12) **西村義人** [①晋州師範学校; ②晋州府大正町 34; 1931年東京美術学校図画師範科卒(東京美術学校校友会, 1932b); 1938年に釜山の中学に赴任し, 1940年に晋州師範学校に転任し, 同年に応召(西村, 2010)] ③「小品」
- (13) **岡部忠之** (③慶尚南道咸陽郡席卜小学校) ④「土堤の麦畑」
- 〈台湾〉
- (14) **山本磯一** [台南師範学校教員; 1923年東京美術学校図画師範科卒(東京美術学校校友会, 1932b)]: ①台南市開山町 3-173
- 〈日本本土〉
- (15) **赤坂次郎**: ②③④⑤東京市深川区亀住町 11
- (16) **岩田覚太郎** [教員; 1927年東京美術学校日本画科卒(東京美術学校校友会, 1932b)]: ①②③愛知県半田市北荒古
- (17) **内山一郎** [教員]: ②③愛知県豊橋中学校 * 作品は②のみ出陳.
- (18) **梅林新市** [教員]: ①②③福岡市住吉先新屋 1722
- (19) **梅原與惣次** [教員]: ②③下関市長府町古江小路

- (20) 江崎幸雄：④
- (21) 小野正男 [医師・版画家]：①②③④久留米市大石町276
 (22) 川上澄生 [教員・版画家]：③宇都宮市外鶴田駅前
- (23) 川邊正巳 [銀行員]：①②③④鹿児島市下荒田町107
 (24) 小井戸藤正：②③④⑤高山市東山愛宕下2950
 (25) 佐藤達雄 [教員]：①豊橋市豊橋中学校 ②③東京市小石川区指ヶ谷町77 東京聾啞学校図画手工室 *作品は①②のみ出陳. 1941年死去(清永, 1941).
 (26) 月岡忍光 [教員・版画家]：①②豊橋市東八町416 ③④長野県松城町東篠村田中
 (27) 中川雄太郎 [版画家]：②③静岡市瀬名 *作品は②のみ出陳.
 (28) 橋本興家 [教員・版画家; 1923年東京美術学校図画師範科卒(東京美術学校校友会, 1932b)]: ①東京市豊島区池袋町3-1566 ③東京市豊島区千早町3-5 *作品は①のみ出陳.
 (29) 武藤完一 [大分師範学校教員]：①②③④大分市春日浦
 (30) 守洞春 (呉服商・版画家)：①②③④⑤高山市城坂

「一覧」から、日本本土からは東京、栃木、長野、静岡、愛知、岐阜、九州各県など、日本各地から玩具趣味の教員や版画家などが朱美之会の会員となっていたのがわかる。『土偶(志)』に版画を寄せた会員以外にも、全国各地の版画家などに広がりを見せており、板や料治、「榛の会」など版画界の著名な版画家との交流を通して、清永の仕事が日本本土の版画家に知られたことによる。また、そうした交流の1つとして地理的に近接し、日本全国にそのネットワークを広げる『九州版画』との交流は、清永らのネットワークの広がりに影響したと考えられる。『九州版画』終刊号に掲載された会員名簿によれば(武藤, 1941b), 日本全国から37名の参加があり(注6), 朝鮮からは、いずれも朱美之会の会員である清永完治, 岡田清一, 佐藤米次郎, 岡部忠之(生没不詳)の4名が記されている。武藤は、『朱美』



図13. 土堤の麦畑, 岡部忠之, 1941(清永, 1941), 鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵.



図14. 洗濯女, 岡部忠之, 1937, (武藤, 1937a), 東京都現代美術館蔵.

が創刊した1940年5月に、大分師範学校の修学旅行の引率で朝鮮及び満洲を旅した際に、「版画の友人」のうち清永、岡田、佐藤らと面会できたと記しており（武藤、1940）、すでに清永とは交際していたと分かる。また武藤は『朱美』創刊以来の会員で、第1冊から第4冊まで大分から作品を寄せている（清永、1940a-c；1941）。既述した岡田清一のように、佐藤も1934年頃から同誌における作品発表などを通して武藤と交流をしていた（辻、2017）。

『九州版画』の会員名簿（武藤、1941b）にある岡部忠之については、『朱美』には第3冊の会員名簿に初めて現れるが（清永、1940c）、実際の出陳は第4冊だけである（図13）（清永、1941）。それ以前に版画作品の発表が確認されるのは『九州版画』だけで、その皮切りは、1937年7月刊行の第15号（武藤、1937a）であった（図14）。武藤（1937a）によれば、第15号から、朝鮮、咸陽公立普通学校の岡部が加入したとし、「熱心な版画愛好家」と紹介している。1937年以前の岡部の経歴や武藤との交際の経緯は目下のところ詳らかではないが、1937年には岡部が既に朝鮮において版画をやっていたことがわかる。これ以降岡部は『九州版画』に、第20号と23号を除き、第24号まで朝鮮の市井の風俗や風景に取材した作品を寄せている（武藤、1937a-b；1938a-b；1939a；1940a；1941b）。すなわち岡部は、『九州版画』における版画のネットワークを経て、『朱美』に出陳することになったと考えられる。

4. おわりに

『朱美』は、1942年8月25日、清永によって同誌第5冊の封面に「終刊」と記され終わりを告げる。『朱美』第5冊には「朱美通信」が附されておらず、終刊の思いや経緯について知ることはできない。そこで本稿のおわりにかえて、「藪から棒に」（清永、1940a）創刊をみた『朱美』が、どのように終刊に至ったか考察してみたい。

まず、既述のように『朱美』は、日本の戦局の影響を直接的に受け、『朱美』第5冊の会員数は日本本土から4名、朝鮮から3名に激減し、掲載図版も6点となったことが、終刊に至る理由の1つと推し測られる。また、『朱美』はそもそも時局下に創刊し、刊行を続けたが、『朱美』第1冊から第4冊に附された「朱美通信」には、戦争や戦局に関する記述などは一切みられない（清永、1940a-c；1941）。ただ物理的な困難を伝える「朱美通信」に戦時下であることが意識されるばかりであった。そしてそこに掲載された版画作品も、時局を連想させるものは皆無であった（清永、1940a-c；1941）。つまり『朱美』は、実質的に戦争の影響を受けながらも、それに拘泥することのない版画創作の発表の場であり、会員の交流の場として機能していた。しかし第5冊に東京の赤坂次郎（生没不詳）から「少年工」（図15）が寄せられたことで、戦時下に「報国」の意義を負わず、趣味的な意義の刊行を続けることは困難であると清永が観念したのではないか。

しかしながら、清永が『朱美』の終刊を決めた最大の理由は、その母体といえる『土偶志』の継続が困難になったことにあるのではないかと考えている。本稿で明かしたように、『朱美』の刊行は、清永の下に集った釜山郷土玩具同好会の機関誌『土偶（志）』に



図15. 少年工，赤坂次郎，1942，（清永，1942），鹿兒島県歴史資料センター黎明館蔵。

おける玩具表現の最適な手段として、清永が同誌において版画の普及を企てたことが端緒であった。『朱美』の「終刊」に先立つ1942年8月10日、清永は『土偶志』第7期2号に「終刊」とせず、敢えて「休刊」と記した(清永, 1942.8)。『土偶志』には『朱美』とは打って変わって、日中戦争開戦後から断続的に戦争を翼賛する言葉が並び、戦局などを伝え戦時下であることが直接的に表現されている(清永, 1937.11-1942.8)。また盟友小野正男の出征や(清永, 1937.11)、清永の自宅が「出征軍隊の歓送迎宿舍受命」となり、そうした中で『土偶志』の廃刊も考えたとする(清永, 1938.2)。しかし「郷土心を培う重大な使命を持つ玩具研究は愛玩報国である」との言葉を得て、刊行の継続を決意したとしている(清永, 1938.6)。そして、軍用鳩や軍用犬、軍馬を偲び、鳩や犬、馬の玩具をモチーフとした版画の特集号を組む等して(清永, 1938.6; 12; 1939.5)、『土偶志』において「愛玩報国」を実践していった。しかし遂に『土偶志』第7期2号に「土偶志休刊の辞」の掲載に至った。そこには清永の本誌への思いが赤裸々に綴られている(清永, 1942.8)。8年間に20冊刊行した同誌の編輯を、「血のにじむ苦痛を感じるほど編輯に行き詰まった」こともあると記し、「手塩にかけて育て上げた土偶志に暫く『さようなら』をつけるのは全く辛い」、そして「土偶志への愛着はまだつきません。だから敢えて休刊と云います」としている。

このように両誌から窺い知ることのできる清永の思いの違いから、清永らにとっての版画創作が、当初から一貫して玩具趣味の追求に付随するものであったとみることができるのではないか。すなわち、『土偶志』の刊行が継続されなくなったことが、『朱美』終刊の最大の理由であったのではないか。こうしてみると清永にとって、版画創作や『朱美』の刊行は、郷土玩具の普及活動と表裏一体の活動であったといえる。

謝辞

本研究は科研費15K02181の助成を受けたものです。

本稿の作成に当たり、下記の機関並びに個人の皆様にご協力ご指導を賜りました。ここに記して深く感謝申し上げます(敬称略)。

成均館大学校 金炫淑、徳成女子大学校 権幸佳、北海道立函館美術館 井内佳津恵、河野実、武藤隼人、入江一子、神奈川県立近代美術館葉山館 李美那、東京都現代美術館、畑山康之、千葉市美術館 西山純子、名古屋大学情報・言語合同図書室、兵庫県立美術館 鈴木慈子、和歌山県立近代美術館 植野比佐見、国立国会図書館関西館、鹿児島県歴史資料センター黎明館。

注記

1. 加治(2005)によれば、1942年12月15日の『九州版画』の廃刊以降に、『きつつき版画集』昭和18年版(平塚運一編輯・きつつき会刊)や、『孔版』(若山八十氏編輯・日本孔版研究所刊, 1944年8月まで刊行)などがあった。しかし前者は不定期刊行であり年1冊の刊行であるため版画集としても捉えられ、また後者は版種が限られている。『九州版画』は定期刊行を掲げ、版種に拘泥しない現物添付の版画誌という意義において戦前最後の版画誌と認識されたと思われる。
2. 『土偶』第1期2号(清永, 1935.9)で、創刊時より会員が2名増員したことが告げられ、同誌第1期3号(清永, 1935.10)に掲載された会員名簿には8人の名前が記されていることから、創刊時は6名であったとわかる。
3. 畑山(2002)では、「尾山明」と混同しているが、尾山明については1932年朝鮮美展第11回と翌年第12回に版画を出陳しており(辻, 2016b)、両者は同一人物である蓋然性は低いとみる。
4. 岡田から武藤に宛てた書簡の封筒裏面には、「六月十□日□」(□は判読できなかった)と記されている。また同封されていた大邱師範学校研究部主催の「図画唱歌夏期講習会」の案内状には、開催日が「昭和十三年七月二十日」とあり、本案内状の作成日は「昭和十三年五月」と記されている。

5. 銅版画の普及に尽力した西田武雄（1894-1961）が編集・発行する『エッチング』（日本エッチング研究所刊）の7号（1933年5月刊）、9号（1933年7月刊）、11号（1933年9月刊）、12号（1933年10月刊）、15号（1934年1月刊）、26号（1934年12月刊）、30号（1935年4月刊）に台湾から各1点作品を寄せている。
6. 同誌終刊号に付された会員名簿によれば、日本本土の参加状況は、都道府県（参加人数）の順で記せば、愛媛（2）、大分（13）、福岡（2）、岐阜（1）、愛知（3）、和歌山（1）、徳島（1）、大阪（1）、広島（2）、北海道（1）、京都（1）、東京（4）、宮崎（2）、長野（1）、兵庫（1）、佐賀（1）、静岡（1）、秋田（1）と各地に会員がいた。朝鮮の他に満洲からも1名参加している。

引用文献

- 加治幸子（2005）*創作版画誌の系譜 総目次及び作品図版：1905-1944年*，中央公論美術出版社。
- 清永完治（1935-1942）*土偶（1937.5から土偶志に改題）*，清永完治。
- 清永完治（1939）*朝鮮の郷土玩具（土偶志臨時号）*，清永完治。
- 清永完治（1940a-c）*朱美*，第1冊-第3冊，朱美之會。
- 清永完治（1941-1942）*朱美*，第4冊-第5冊，朱美之會。
- 京城日報社（1915-1945）*京城日報*，京城日報社。
- 坂本悠一・木村健二（2007）*近代植民地都市釜山*，桜井書店。
- 佐藤米次郎（1941）*蔵書票展覧会記念蔵書票作品集*。
- 鈴木文子（2009）*玩具と帝国一趣味家集団の通信ネットワークと植民地*。文学部論集，**93**，1-20。仏教大学。
- 関野準一郎（1935）*郷土玩具を木版の画材として*。陸奥駒，**17**，夢人社。
- 台湾教育会（1928-1931）*台湾美術展覧会図録（第1回-第4回）*，台湾教育会。
- 高崎宗司（2002）*植民地朝鮮の日本人*。岩波新書，**790**，岩波書店。
- 武井武雄（1939）*第6回榛の会がり版通信上*，**9**，榛の会。
- 武井武雄（1943）*第10回榛の会がり版通信*，**17**，榛の会。
- 朝鮮創作版画会（1930a-b）*すり繪*，**1-2**，朝鮮創作版画会。
- 朝鮮総督府朝鮮美術展覧会（1922-1940）*朝鮮美術展覧会図録（第1回-第19回）*，朝鮮総督府朝鮮美術展覧会。
- 辻千春（2016a）*植民地期朝鮮における創作版画の展開（2）京城における日本人の活動と「朝鮮創作版画会」の顛末*。名古屋大学博物館報告，**31**，25-44。名古屋大学博物館。
- 辻千春（2016b）*植民地期朝鮮における創作版画の展開（3）京城における「朝鮮創作版画会」解散後の展開と「日本版画」の流入*。名古屋大学博物館報告，**31**，45-61。名古屋大学博物館。
- 辻千春（2017）*植民地期朝鮮における創作版画の展開（4）仁川における佐藤米次郎の創作版画活動と時局下の蔵書票展の開催について*。名古屋大学博物館報告，**32**，47-61。名古屋大学博物館。
- 東京美術学校校友会（1932a-b）*東京美術学校卒業生名簿*，昭和6年-昭和7年，東京美術学校校友会。
- 東京文化財研究所（2006）*昭和期美術展覧会出品目録（戦前篇）*，中央公論美術出版。
- 中田孝之介（1905）*在韓人士名鑑*，**12**。木浦新報社。
- 西村義人生誕100年記念展実行委員会（2010）*西村義人 生誕100年記念画集*，西村義人生誕100年記念展実行委員会。
- 畑山康幸（2002）*朝鮮・釜山で刊行された『創作版画 朱美之集』一清永完治とその周辺一*。中国版画研究，**4**，87-98。日中藝術研究会。
- 毎日新報社（1941-1944）*毎日新報（매일신보）*，毎日新報社。
- 武藤完一（1937a-b）*九州版画*，**15-16**，九州版画協会。
- 武藤完一（1938a-b）*九州版画*，**17-18**，九州版画協会。
- 武藤完一（1939 a-b）*九州版画*，**19-20**，九州版画協会。
- 武藤完一（1940）*鮮満の旅とところどころ*。エッチング，**92**，4-5。日本エッチング研究所。
- 武藤完一（1940a-b）*九州版画*，**21-22**，九州版画協会。
- 武藤完一（1941 a-b）*九州版画*，**23-24**，九州版画協会。
- 保田素一郎（1939）*放送室から。朝鮮の郷土玩具（土偶志臨時号）*，**22**，清永完治。

料治朝鳴（1936）朝鮮土俗玩具集（全国郷土玩具集16）。版芸術，53，白と黒社。